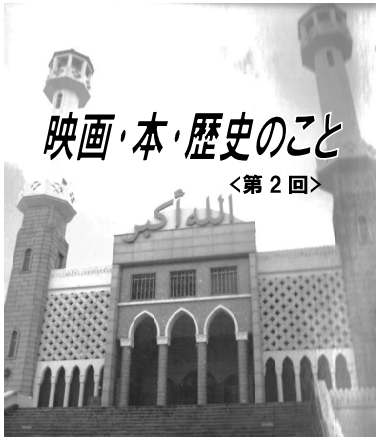
映画・本・歴史のこと

<第２回>



有田誠（ありたまこと）京丹波町在住の映画愛好家

写真はソウル梨泰院にあるモスク（筆者撮影）

小津と黒澤

八年前、二十周年を迎えたプサン映画祭が、「アジア映画一〇〇」を選出した。ベストワンは小津安二郎の『東京物語』（一九五三）、二位と六位に黒澤明の『羅生門』（一九五〇）と『七人の侍』（一九五四）が選ばれた。

小津安二郎（1903～1963）

イギリス映画協会は十一年前、月刊『サイト＆サウンド』誌上で、世界映画史上のベスト一〇〇を選んだ。ベストワンは『東京物語』であった。

こういう監督は、人々に大きな影響を与える。わたしは尾道の浄土寺で、また熱海の海岸で写真を撮ったとき、笠智衆になっていた。ロンドンの映画館で『東京物語』を観たとき、隣席のパンクの兄ちゃんが泣きじゃくっていた。

例えば台湾の侯孝賢（ホウシャオシェン）は、小津へのオマージュとして、東京で『珈琲時光』（二〇〇三）を監督した。ドイツのヴィム・ヴェンダースは、小津についての記録映画『東京物語』（一九八五）を撮った。フィンランドのアキ・カウリスマキの映画には、赤いポットなどの備品が必ず画面の中に配置される。小津の『彼岸花』（一九五八）や『秋刀魚の味』（一九五二）の色彩や美術を見較べれば、その影響は明らかである。

黒澤明の場合は、その父性主義的資質のゆえか、米国の監督たちに影響を与えた。

『東京物語』の笠智衆、左は原節子

例えばサム・ペキンパー。『ワイルドバンチ』（一九六九）、『ゲッタウェイ』（一九七三）など、すさまじい殺戮場面の、しかし、美しいハイスピード撮影は、彼独特の演出スタイルである。それらは『七人の侍』で宮口精二が居合で人を切る場面の模倣だろう。ジョージ・ルーカスの『スターウォーズ』（一九七七）は『隠し砦の三悪人』（一九五八）の宇宙版だ。ジョン・ミリアスの『風とライオン』（一九七五）のショーン・コネリーは、『隠し砦』の三船敏郎そのままである。

イタリアのセルジオ・レオーネは、『用心棒』（一九六一）をそっくり『荒野の用心棒』（一九六四）として盗用した。これで大スターになったクリント・イーストウッドは、後に監督した『許されざる者』（一九九二）をレオーネに捧げている。『影武者』（一九八〇）の製作費は、スティーブン・スピルバーグ、フランシス・コッポラ、ルーカスが調達した。『デルスウザーラ』（一九七五）はソ連の、『乱』（一九八五）はフランスの製作である。『夢』（一九九〇）にはマーチン・スコセッシがゴッホ役で出演した。

人真似をすればいい

人間は先達の才能に同化、到達することを願い、ひたすら引用、模倣をつづける。まずは、その型にはまろうとするのである。これが成長ということであろう。

八十年代以降の教育現場は、やれ個性だ、自己実現だと子供たちを振り回しつづけた。自分から師を見つけ、型にはまる流れから体得する成熟を妨害ばかりしてきた。

高校二年生だったわたしは、ジャン＝ピエール・メルヴィルの『サムライ』（一九六七）を観た。アラン・ドロンの寡黙な殺し屋がわたしに憑依した。学校で突然しゃべらなくなり、それはひと月ぐらいつづいた。みんなにバカにされたものである。大学一年のときには太宰治をまとめ読みして、津軽へと旅立った。野坂昭如を一〇〇冊近く読んだわたしの文体は、質はともかく、彼そっくりになった。イラストを描けば、水木しげる、つげ義春になる。

黒澤明（1910～1998）

自立とは、助けてくれる人を自分で見つけることだと思う。一人ですべてをやろうとしたり、できると勘違いするのは、単なる孤立である。国家が人々を分断支配するため持ち出したのが、誤用としての個性、自助、自己責任である。一人ひとりを未熟で孤立した袋小路に追い込んで、目先の権力安泰を図る。何が自己啓発だ。

『七人の侍』から、最前面が三船敏郎、右端が宮口精二

もっと映画を観て、自分の頭で考えればいい。お互いが助け合う世の中を目指して。

『イスラム精肉店』

一九七七年初めて韓国を旅行し、板門店に行った。境界の北側の警備は、チェコスロヴァキアとポーランドの軍隊だった。朝鮮戦争では、韓国側としてトルコやギリシャも参戦している。トルコ軍は言葉に不慣れなことから、味方の韓国軍二百名を捕虜にしたり、命令なしに逃げたりしたらしい。もっとも、これはトルコ軍よりも、GHQから現場に至る米軍上層部の無能ゆえの逸話らしい。

『イスラム精肉店』（新泉社22年）は戦後、ソウルに居残ったムスリムのくせに豚肉を売るトルコ人のハサンおじさんと隣人たちの物語。悪態をつきながら、間借り人のギリシャ人残留兵ヤモスおじさんにタダ飯を提供する食堂のアンナおばさん、そして孤児院からハサンおじさんに貰われてきた「僕」を中心とした心とからだの傷の物語である。「僕」はまだ子供だが、鎖骨の辺りに銃創らしきものがある。しかし、記憶はない（一九八〇年の光州事件で全斗煥（チョンドゥファン）の軍隊に撃たれたと推測できる）。

作者はソン・ホンギュ（一九七五年生まれ）。小説家とは、言葉の意味を本質でつかまえ、これほどまでに独自の世界を構築できるのかと、感じ入ってしまう。水平線の向こうにまで開いた共助の物語である。

韓国文学が次々と翻訳、出版されるのはありがたい。その翻訳者の多くが女性であることに気づいておくべきだろう。